

## 政策提言・課題共有シンポジウム

### 「孤立・排除から共生への転換へ」

本会では会員・事務局が一体となって政策提言活動に取り組んでいます。提言活動では福祉制度・施策の充実・発展への働きかけとともに、関係者から提起された課題を分野横断的に協議し、目指す「福祉社会」を共に考え、協働していく過程につなげることを重視しています。その一環として、1月13日、「孤立・排除から共生社会への転換に向けて」をテーマに、課題共有シンポジウムを開催しました。福祉施設関係者、民生委員児童委員、更生保護関係者、行政、社協など108名が参加しました。

### 福祉現場の共通課題 「人材確保」

本年度の政策提言で「福祉・介護人材の確保・養成・定着」が共通の課題に挙げられたことを踏まえ、前半は、県立保健福祉大学名誉教授の根本嘉昭さんが「我が国の福祉・介護人材の確保をどう考えるか」と題して講演しました。根本さんは、社会福祉（事業）法の変遷に見る福祉サービスの变化を概説、データに基づき福祉・介護人材の現状を紐解き、実態を

踏まえた展望を話しました。さらに、人材確保の問題を含むこれらの福祉サービスのあり方について「地域の需要は地域でまかなう」方向性とし、「多様な生き方（生涯現役社会）の追究」「セカンドライフとしての介護・保育の現場」などの考え方を示しました。参加者からは「地域づくりという面でも考えさせられた」「地域のことは地域でという考え方が浸透」「中高年齢者の社会参加の支援を積極的に取り組んでほしい」など多くの共感の声が寄せられました。

### 少数の声、抱える課題を知り合う

後半は県立保健福祉大学教授の臼井正樹さん（政策提言委員会副委員長）の進行のもと、まず、更生保護法人報徳更生寮施設長の田上俊さんが課題提起を行いました。更生保護施設入所者の現状に触れ、「家族関係の悪化や非正規雇用による生活困窮など、入所者が抱えている生きづらさは、犯罪というファクター（要因）を除いても、社会一般と重なり合うことが分かる。『特殊な人たち』ではな

い」とし、犯罪歴があることで社会的排除を受けやすい人たちの地域生活の定着に向けては「当たり前前」のことが当たり前でない人がいるという認識を持つことが課題解決への一歩」と提起しました。



上段左から臼井正樹さん、根本嘉昭さん、下段左から田上俊さん、伊藤光子さん。研究や実践、体験に基づく貴重な発言に参加者は聞き入った

県重症心身障害児（者）を守る会会長の伊藤光子さんは、全国でも約4万人しかいない重症心身障害児・者について「まずは重症心身障害児・者が地域にいるということを知ってもらうことが大事」と話し、「施設とは地域に根差した家（家庭）である」として、職員に対する思いや期待、意思決定支援の大事さに触れました。さらに、県内で起きた障害者支援施設の殺傷事件を風化させてはならないと強調。「偏見は、知らないから生まれる。弱い者を排除することは、その次に弱い者を排除することに

つながる」として、障害のある子もない子も共に育つインクルーシブ教育の大切さを訴えました。

### 分野を超えた課題共有から協働へ

会場も交えた意見交換では、地域社会の中で障害のある人へ厳しい眼差しが向けられた体験や子どもが騒音として苦情につながる現状などが語られました。

福祉・生活課題や生きづらさが多様化する中で「共に生きる」といかにどう取り組んでいくか。決して簡単な課題ではありませんが、参加者アンケートでの「知らないことだらけでショックを受けた」「更生保護施設のことには知らなかった。自分の知らないものは世の中にたくさんある」「自分の働く現場にも通じる課題を見つめることができた」等、立場や分野・種別を超えて課題を共に考えることの意義やそこでの気づきについての意見から「協働」の源泉となる課題共有がまた一歩進んだことがうかがえました。

本会では今後も、分野・種別を超えて課題を協議・共有する過程を大切に政策提言活動に取り組みます。

（企画調整・情報提供担当）